

2015年度ニチメン東京社友会総会・懇親会開催のお知らせ

恒例の社友会総会・懇親会を下記要領にて開催いたします。

場所は、既にお馴染みの、双日(株)の本社（飯野ビルディング）で行ないます。

皆様多数のご参加をお待ちしております。

開催日：2015年7月14日(火) 12:00～14:00（開場11:30）

会場：双日株式会社・本社21階 大会議室

所番地——千代田区内幸町2-1-1 飯野ビルディング内

アクセス：*メトロ千代田線・丸ノ内線・日比谷線「霞ヶ関」下車、出口C4方面へ。

案内板に従いつつ、館内エスカレーターを利用して

3階オフィス・ロビー迄。

*メトロ銀座線「虎ノ門」下車、出口9。飯野ビルまで徒歩3分。

当日会費：無料（軽食、飲物を用意致します）

年会費：現金での受取りは、原則お断りしております。

（お金の管理に、現場で間違いがあっては申し訳ないからです。）

お手数でも、銀行振込で、お願いします。

・・・振込方法は、別項「事務局からのお願い」を参照下さい。

特記事項

① 同封の出欠確認のハガキを必ず投函ねがいます・・・締切6月25日（木）必着。

② このビルはセキュリティ確保のため、**入館カード**が必要です。

3階ロビーの双日受付付近で待機している担当世話人に氏名を告げて、

このカードを受取った上、ゲートを通して下さい。

ゲート出入りの要領は、SUICA や PASMO の 使い方と全く同じです。

*その他お問い合わせは、

会報末尾の「世話人一覧表」記載の世話人にお寄せ下さい。

FAX：03-6858-7216, Eメール：menkwa@sojitz.com

2015年新年賀詞交歓会における会長挨拶

会 長 島 崎 京 一



皆さん、明けましておめでとうございます。

私事にわたりますが新年を迎えて風邪をひきまして、2～3日前の状況ですと今日は出席できないかもと心配しておったのですが、掛りつけのお医者さんのところに行きましていろいろ事情を説明して、とにかく治して欲しいと言って頂いた薬が良かったのか、何とか今日こうして出てくることができました大変喜んでおる次第であります。

しかも昨日とは違って今日は全く好いお天気で、ここからの景色を見ていますと、ああ来て良かったなとつくづく思います。左様に懐かしい友達、親友、先輩が結構大勢おられますね。私も82になったのですけれども、先輩がずいぶん沢山おいででございます。

今日はまたあの昔の友達の方々とゆっくり歓談させていただきたいと、かように思っている次第であります。

さて、今年はまた皆様方にとっても大変難しい2015年になるのではないだろうか、という風に思うわけであります。

昨年末の衆議院選挙では、私も悩みに悩みながら、やっぱり安倍さんでしかしょうがないのかと、自民党に入れたのですけれども、それが吉と出るか凶と出るか、アベノミクスもどうなるかわからない。それから、「イスラム国」の問題、近隣国との軋轢の問題、それと原油価格暴落の問題など、今まで経験したことのない色んな難しい事態が起こっているからです。

今日は佐藤社長以下、沢山の役員の皆様においで戴いて誠に有難いことでございます。

けれども、これから今年の舵取り、大変なことだというふうにお察し致します。

この新しい会場で新年会、総会をやるのは、今回は確か4回目なんですけれども、4回目になってきますと、双日に対する親しみというか、まあ私自身には此処がニチメン社友会の本拠なんだなあという感じがしています。

前の赤坂のビルの方では、そんな感じはなかったんです。

それだけに、双日頑張れということで、声高に応援し度いと思います。我々はもう年取ったんで、まあ1年でも長くですね、皆様とこうして昔話が出来ることを願ってやみません。

それとまた、世話役の人達も本日の開催のために皆さん努力して来られたことを、ずっと眺めて来まして、よくぞ、と、とても嬉しいことだなあと思っておる次第です。

ということで、今年もまた元気よく一年を過ごして行きたいと思っております。

以上簡単でございますが、ご挨拶と致します。

2015年新年賀詞交歓会における来賓ご挨拶

双日株式会社 代表取締役社長 佐 藤 洋 二



皆様、明けましておめでとうございます。

本年も皆様のお元気な顔を拝見し、大変嬉しく思っております。

本当に皆様お元気でおられ驚かされることは沢山ございますが、このように毎年お会い出来るのは我々現役にとっても非常に楽しいひと時でございます。この元気を引き続き我々に与えて行くのだ、という気概と気力をもって、これからもお話し頂きたいと思っております。

さて、この2015年ですが、先ほど島崎会長からお話がありましたように、最近の相場は多少荒れており、少し不透明感が増しているのではという感じが致します。

双日は昨年10周年を迎え、次の10年に向かっての新年度は、2014年4月から始まった訳でございます。当初、期初は多少苦しいかも知れないが、期末に向けて相場もよくなり、環境としては少し上り調子になるだろう、といった見立てをしてスタートした2014年度でした。2014年度の年度末までは何とかそういった見立てのライン上に乗った形で推移して来たというのが我社の状況です。

今年度（2014年度）は、会社の業績目標として掲げた当期純利益330億円を達成するという年であり、そのライン上として、この1～3月を乗り切ろうと思っていた矢先でした。ここに来ての原油価格の下落、そして為替の乱高下、と云った非常に難しい局面を迎えておりますが、これを乗り切って、次につなげて行くということになります。私共はご存知のように、大半の収益をエネルギー・金属資源の中で勝ち得ています。

それが、原油価格は45ドル/バーレル近くまで下落し、為替も一時は80円/ドル前後でしたが、今や凄いいレベルの円安になっています。全体を考えれば、円安それ自体は概ね良いのですが、ここまで円安になると色々と不都合も出て参ります。このような中で、我々の業績がどういう形になるのかご心配もあろうかと思えます。多少の凸凹はあるかも知れませんが問題はありません。そのためにこれまで10年苦勞してきた訳ですが、会社の安定した基盤というものは磐石でございます。

なお、新しいお話しを多少申し上げます。今までなかったような取組みも始めておりまして、セグメント毎に簡単にご紹介致します。

機械部門では、再生エネルギーとして太陽光発電を進めております。100メガ以上の発電事業を北は北海道から南は九州までの4か所で行っており、概ね順調に進展しております。この4件の買い取り価格は、一番高い42円/キロワットでございますので、いま世間で言われております買い取り価格の下落については我社には影響がない状況です。

再生エネルギーとして、現在取り組んでいる太陽光の収益は、2015年度から出て参りますが、この収益を元に、次の再生エネルギーの領域に踏み込んで行きたいと考えております。いま主に検討しているのは、地熱、それと風力、といったところです。

それから、中東ではIPPプロジェクト（独立系発電事業）を行っていますが、こちらも概ね今年から収益に貢献して来る、という状況であります。

また、インフラ関連の事業にも注力していきます。

具体的には、航空機分野における空港インフラ事業、ガーナの淡水化プロジェクト等の環境ビジネスへも取り組みを進めております。

次は生活産業部門ですが、この分野は期近かでのチャンスを掴み易いという認識をしており、今はアジア地域での展開を強めております。具体的な取引先名は未だお伝えできませんが、製菓業において量販店と組み、ベトナムやその他のアジア諸国で大きく展開をして行く予定で、ほぼ合意に達しています。

また、従前から安定収益を我々に提供してくれているのは化学部門でございますが、この部門については今までの収益の柱を更に太くする、という取り組みを行なっています。

例えば、インドの工業塩については新たな投融資を決定致しました。メタノール事業につきましては、海外で複数の追加案件を検討しており、第二、第三のメタノール事業を目指し、現在チャレンジの最中でございます。

夫々のセグメントには色々な特色があり、また事業を行っている地域も異なりますが、更なる飛躍と収益の拡大を目指し、我々現役は様々な仕込みをやろうとしています。

10年前に我々が統合した時のアセットは、先輩諸氏から我々に残して頂いた大切な財産ですが、今申し上げたような新たな次の10年を約束してくれる資産に少し入れ替えをさせて頂きたいと考えております。このような新しい資産が、また次の高収益に向けての活力を生んで行く、ということを信じて次の一手を打とうとしている訳です。

また一方では、トラディショナルな事業も復活させたい、という気運もあります。

例えば、繊維ですが、この事業ももう一度やろうと思っております。

このように色々なところで各部門の現役が頑張っておりますが、我々としては先輩諸氏が我々に残して頂いた大切な資産を、少し入れ替えさせて頂きながら、新たな資産をお見せして行く機会を持ちたいと思っており、それが必ず結実するということを信じて頑張っておりますので、引き続きのご鞭撻、ご支援をお願いしたいと思っております。

すこし長くなりましたが、本日ご出席の皆様のご健康を祈念いたしまして、私の新年のご挨拶とさせていただきます。ご静聴、どうも有難うございました。

ご 長 寿 お 祝 い

世話人 西 村 照 男

2015年度賀詞交歓会において、ご長寿会員表彰がなされました。

当日の出席者は、伊藤安雄さん、平岡昭三さんのお二人でしたが、当会からお祝い金を贈呈いたしました。

なお、その他表彰者は、白寿の藤田 一郎さん、米寿の蟻本 守夫、堀部 義数、高間 宏治、中村 昌義、伊達 邦雄の皆様です。

どうぞこれからも 御自愛下さい。



表彰者代表 ご挨拶の伊藤安雄さん、その横には、平岡昭三さん。



2015年度 新年『賀詞交歓会』開催報告

編 集 部

1月16日（金）双日㈱本社会議室において恒例の新年会が催された。
寒さにもめげず大先輩をはじめ懐かしい方々が、開場11：30には続々と集まられた。

総合司会 MC塚本幸雄世話人、MCアシスタント・小堀裕子さん。

12：00 冒頭、当会会長・島崎京一さんのニューイヤー・スピーチ。
続いて、ご来賓代表・双日㈱代表取締役佐藤洋二社長よりご挨拶を頂く。
双日の現況および目指すべき将来像について語られた。
（詳しくは、別掲のスピーチ全文をご覧下さい。）

ご長寿お祝いの表彰式も終わり、初春の喜びの“乾杯の儀”は、大先輩の岩居宏一さん。
以後、談笑の輪は彼方此方に拡がり、美酒と美味の料理を楽しむ。

やがて時が経ち、お名残惜しいが、中締め時間となり、副会長兼代表世話人の倉又則夫さんの発声で一本締めとなった。

又来年も元気でお会いできることを祈りつつお開きとなる。

*出席者名簿は別掲の通り；



2015年新年賀詞交歓会懇親会風景



2015年新年賀詞交歓会 懇親会風景





◎ 2015年1月16日開催 賀詞交歓会 ご出席者名簿

(敬称略)

[会 員]																							
ア	青	木	政	和	ク	倉	又	則	夫	ナ	滑	川	和	子	ヤ	山	本	昌	裕				
	東	田	信	子		栗	田	久	彌		成	見	和	男		山	本	幸	江				
イ	池	本	照	幸	コ	古	藤	彰	三	二	西	田	武	弘	ヨ	吉	川	秀	夫				
	池	川	俊	通		小	西	重	勝		西	村	昭	男		吉	川	邦	浩				
ウ	石	黒	博	保	サ	小	林	靖	幸	ハ	西	村	照	男	[双日関係 ご来賓]	原	藤	洋	大				
	石	澤	由	紀		近	藤	厚	子		西	村	喜	郎						佐	谷	繁	二
オ	石	原	謙	一	シ	五月	女	良	造	ヒ	橋	谷	和	郎	[双日関係 ご来賓]	段	口	真	一				
	伊	藤	安	雄		坂	井	潤	穰		花	澤	榮	洋						茂	木	良	夫
カ	伊	居	宏	一	ス	笹	井	悦	一	フ	長	生	信	恭	[双日関係 ご来賓]	此	山	哲	弘				
	岩	田	英	昭		佐	原	三	弘		久	本	紘	一						込	田	雅	彦
キ	宇	木	克	利	ソ	三分	一	克	美	ホ	平	岡	幹	雄	[双日関係 ご来賓]	喜	多	敏	志				
	大	北	隆	三		柴	田	京	實		廣	田	雄	孝						花	井	正	勤
力	大	塚	悦	子	タ	島	崎	好	一	マ	深	尾	昭	二	[双日関係 ご来賓]	武	田	秀	裕				
	大	西	禎	勇		新	浦	佳	孝		福	原	正	之						丸	井	正	人
リ	大	野	栗	作	ツ	杉	本	忠	久	ミ	堀	間	典	代	[双日関係 ご来賓]	山	井	龍	太				
	大	場	啓	雄		須	藤	宏	晃		本	湯	登	志						平	田	龍	悟
ロ	大	森	弘	彦	ナ	陶	山	春	司	ム	牧	山	洋	生	[双日関係 ご来賓]	高	濱	昭	康				
	大	山	隆	夫		曾	我	正	一		梶	尾	磐	夫						西	村	昭	夫
ハ	大	田	睦	久	タ	園	山	恒	一	ミ	本	野	俊	次	[双日関係 ご来賓]	土	橋	讓	治				
	大	村	有	次		大	原	允	德		梶	浦	憲	一						鈴	木	讓	一
ヘ	小	野	賢	司	ツ	高	木	秀	宏	ム	三	嶋	甲	敏	[双日関係 ご来賓]	伊	知	八	重				
	小	野	泰	順		高	瀬	可	子		三	堀	敏	夫						青	木	俊	弥
ニ	小	田	泰	治	ト	高	田	眞	能	ム	水	江	博	三	[双日関係 ご来賓]	柏	井	聰	子				
	小	野	順	郎		田	内	幸	啓		溝	井	靖	武						伊	木	聰	子
ホ	勝	木	和	彦	ナ	塚	川	慎	雄	モ	村	上	泰	生	[双日関係 ご来賓]	高	橋	洋	平				
	鏑	田	奈	緒		利	福	清	二		森	江	健	児						小	井	恵	子
ヘ	龜	崎	緒	子	ナ	豊	川	十	郎	モ	矢	島	一	孝	[双日関係 ご来賓]	高	橋	真	智				
	唐	西	幸	雄		中	谷	宣	英		山	山	陽	光						六	反	真	子
キ	川	津	厚	二	ナ	中	原	正	一	モ	山	山	浩	一	[双日関係 ご来賓]	高	橋	洋	平				
	木	川	弘	明		中	島	憲	一		山	山	本	郎									

(以上 138名)

(以上 138名)

ともに未納会費は振込み願います。

振込先は、下記いずれかを利用して下さい。(振込手数料は各自ご負担願います。)

1) ゆうちょ銀行

口座番号：00100 - 4 - 318041

口座名義：ニチメン東京社友会

2) 三菱東京UFJ銀行 東京営業部

普通口座

口座番号：8225155

口座名義：ニチメン東京社友会 代表 倉又則夫

振込に際しましては、振込者名欄にご自身の名前を最初に左詰めにて記載願います。

(ネンカイヒ、ニチメン、XXネンドカイヒ等の記載があると振込者名が通帳に記載されず、振込者が特定できません。)

(註1) 長寿会員は年会費免除になっておりますが、長寿会員からご送金を頂いた場合は当会へのご寄付とみなし処理させていただきます。(会運営上大変助かります)

但し、何らかの手違い等であれば事務所までご連絡下さい。

(註2) 長寿者氏名：(50音順敬称略)：

相原淑、石川勝美、井本公一、岩居宏一、江渕正昭、大野久生、大村譲、柿本寅之助、河西郁夫、門松孝、上条達雄、木内純一、北村俊夫、国領和彦、近藤貞一、斉藤弥、佐藤信世、椎木与志也、南部晴雄、西尾敬一、福原昭二、藤田一郎、藤野泰三、古川熙、松尾憲一、丸山修作、三宅葉、宮田信雄、望月昌徳、山口富治、山口富美子、山口良孝
以上32名

今年から長寿者になられた方

蟻本守夫、伊藤安雄、高間宏治、伊達邦雄、中村昌義、平岡昭三、堀部義数 以上7名

今年の長寿者は、39名です。

(註3) 2015年度(2015.7～2016.6) 年会費納入済会員 (50音順敬称略)：

青木繁行、青木浩、赤澤宏哉、浅井正彦、東信子、池田照幸、池本俊通、伊藤尚志、今田時男、岩田功、浦谷弘三、海野敏夫、大谷毅丈夫、大平栗雄、大村善勇、大森啓作、大山陽子、小野宗一、亀田昭、唐崎和彦、河本吉人、北川敬、木寺厚二、木村敬男、京野勉、久芳成、窪田厚三、熊谷信弘、倉持次雄、小西重勝、佐々木俊郎、島田俊彦、清水武人、下浦通洋、白坂泰之、新藤孝、新野敬一、菅沼利太郎、高橋正、竹内可能、田所忠彦、田中勤、土屋秀雄、土井安之、土橋勇、豊木啓喜、豊福清二、中谷宣英、中谷勝、中村静人、中村昌義、西川周、西田昇、西野幸夫、野城恒男、野本定男、羽中田鐵也、久本紘一、平井出良彦、藤井正之助、藤井宏憲、藤澤裕武、細井康男、細谷和夫、堀江亘、堀典代、松坂茂、松田邦夫、松田實、三嶋敏夫、安武国章、八津道夫、山邑陽一、吉川敏朗、若月義和、渡辺重幸
以上76名

訃 報

(平成26年12月1日～27年5月31日)

ニチメン東京社友会

※非会員

	氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
1	※岩 本 宏	化 工	2015年02月06日	69歳
2	※大 広 淳 一	織 維	2015年02月17日	86歳
3	木 村 次 朗	鉄 原	2015年02月26日	82歳
4	高 木 亨 一	機 械	2015年03月05日	77歳
5	瀬 川 正 裕	織 維	2015年03月06日	80歳
6	神 原 勝 行	業 務	2015年05月03日	74歳
7	諸 橋 良 吉	業 務	2015年05月05日	88歳

ニチメン大阪社友会

	氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
1	※田 中 康 夫	運輸保険	2014年03月22日	91歳
2	朝 倉 久 年	織 維	2014年11月26日	91歳
3	蔭 山 晴 一	織 維	2015年01月11日	81歳
4	香 月 孝	木 材	2015年03月07日	92歳
5	※岩 谷 宣 治	織 維	2015年03月31日	92歳
6	荻 野 泰 弘	織 維	2015年04月01日	87歳
7	田 島 信 雄	鉄 鋼	2015年04月16日	88歳
8	※侍 山 卓 哉	木 材	2014年09月05日	85歳
9	木 下 彪	化 工	2015年05月24日	79歳
10	野 村 安 正	食 料	2015年05月27日	79歳

ご冥福を、お祈りいたします。合掌



ニチメン・テニス部OB/OG会開催

園 山 春 一



旧ニチメンの各種部活動の中でも、歴史と伝統に輝くテニス部はここ十数年OB/OG会を持つことなくいつが最後の集まりだったかさえはっきりしないほど休眠状態が続きました。やっと後述する皆様のご努力により旧ニチメンの南柏の家族寮と独身寮に設置されたテニスコートで念願の第一回大会の開催に漕ぎつけました。

当日は晴天且つ無風の最高のテニス日和となり集まった女性6名と男性11名の

OG/OBが朝10時より夕方16時まで昔懐かしいパートナーやライバルと黄球を思う存分打ち合いテニスプレイヤーにとり忘れがたい一日を過ごしました。

旧ニチメンテニス部は、東京本社では1949年に発足したと聞きますが、おそらく大阪本社はさらに長い歴史を持っていると思います。東京のテニス部がホームコートを持つのは1960年代末になってでした。発足以来約20年間は都内の貸コートや銀行のコートを借りて活動続ける苦難の道を歩みましたが、その間先輩、後輩のテニス愛好家が部を支え、東西ニチメン交流戦、商社対抗戦、関係会社との定期戦を継続し、その上軽井沢にて毎年夏の合宿を張り東京のテニス部の歴史と伝統を育んでくれました。商社という会社組織が求める本部中心経営は横断的知己を得ることに限界がありますが、テニス部は横断的友情形成と“all in one”の精神を具現し、社の業績向上に貢献したのではと、この21日コートに集まった仲間を見て再認識し、誇りに思った次第です。

このような会に欠かせない夜の部も最寄りの焼肉屋で宴会のみに参加された方も含め春の一夕を昔をしのいだ思い出話を中心に盛大に盛り上がったことを付記いたします。

こんなに楽しい会があるのかと思わせた集いを開催するための音頭取りをなさった川口さん、枡潟さんのご尽力に感謝し、このような会を今年限りとせず来年以降も継続したいとの願いが参加者皆の希望がありました。この希望に添うべく来年も同じような企画を実施したいとおもいます。

ついては、本会報をお読みの方で、今回の会に出席できなかった方、ご案内が行かなかった方、そして、読者の皆様の周囲の方々に旧テニス部の方がいたら来年春の会にぜひ参加するようお勧めください。

テニスと旧ニチメンをこよなく愛す方々、来年もぜひコートで一戦交えましょう。

テニス部関連で聞きたいことあれば、幹事役の枡潟さん、あるいは、嘉瀬さんに連絡ください。連絡先は以下です。

枡潟 磐夫 (OB)

MAIL ADR : masugata@r7.dion.ne.jp

電話 : 047 - 343 - 3030

嘉瀬 正彦 (双日システムズ株式会社)

MAIL ADR : kase.masahiko@sojitz-sys.com

電話 : 03 - 3515 - 1066



左から

滝田 振一、嘉瀬 正彦、枡潟 磐夫、園山 春一、
細川 邦夫、善積 英之、樽川 眞蔵、
川口 祐二、保科 孝、浜地 道雄

後列左から

滝田 振一、川口 祐二、枡潟 磐夫、樽川 眞蔵、
細川 邦夫

中列左から

嘉瀬 正彦、保科 孝、杵渕 邦子(旧姓:片山)、
富田 保、水谷 尚子(旧姓:飯塚)、園山 春一、
善積 英之

前列左から

高橋 昌子(旧姓:田辺)、井上 真由美(旧姓:
中園)、木造 まゆみ(旧姓:杉田)



後列左から

杵渕 邦子(旧姓:片山)、細川 邦夫、
水谷 尚子(旧姓:飯塚)、富田 保、高橋 昌子
(旧姓:田辺)、園山 春一、川口 祐二

前列左から

伊地知 紀仁、樽川 眞蔵、木造 まゆみ(旧姓:
杉田)、井上 真由美(旧姓:中園)、善積 英之、
保科 孝、枡潟 磐夫、蓮沼 恒郎、嘉瀬 正彦

俳句の会「いろは句会」

塚 本 幸 雄

昨年11月には「いろは句会」は創設されてから25年第三百回を迎えましたが、以来今年の5月まで毎月の例会をもつと共に4月には目黒川堤にて花見吟行を行いました。

約4キロに亘る堤の桜の大樹はいまや樹齢半世紀堂々と見事な桜を咲き誇って居り参加の皆さんはそれぞれ花を愛でるとともに俳句作りに励んだことは言うまでもありません。

以下に12月から4月までの例会に提出された句から皆さん自薦の俳句をご披露致します。

宇治田 薫

風この国に生れし仕合せ根深汁
若菜粥食みて心のひと区切り
七十年戦なき世の御慶かな

久保田 悦子

寒明けや変幻自在朝の雲
節分や小さき声の福は内
店先のお花を選ぶ入り彼岸

佐藤 英二

新年の箱根独走山の神
また一人巨星旅立つ冬の空
ふと思ふ四年の時よ北の春

下川 泰子

一年の福いただくや雑煮餅
春の戸を叩く目覚めの息吹かな
花冷えや届かぬ思ひ行き違ひ

塚本 光生

囀りや次の一群れ待つ間合ひ
源流の高まる瀬音深き春
母の味妻の味あり根深汁

藤野 徳子

異国語の行き交ふてゐる初参
春浅し鉦彫り像に鑿の跡
おだやかな光あつむる夕桜

若月 義和

婚礼の一ト日を終へて根深汁
歳末の喧騒外に第九かな
なかなか出来ぬ断捨離二月尽

二伸

当「いろは句会」にご興味のある方または入会ご希望のかたは下記句会代表までご連絡願います

塚本幸雄 携帯電話 090-8009-1165 又は PC メール y_tsukamoto@nexyzbb.ne.jp

第10回 「ニチメン機友会」 開催ご案内

日 時 2015年10月17日（土） 12：00－14：00

会 場 アルカディア市ヶ谷 《私学会館》
東京都千代田区九段北4－2－25

会 費 男 ； 7,000円、 女 ； 5,000円

会 長 水庫 博夫

当番幹事 ； 産業機械本部

後刻、ハガキないしはメールにて、ご案内、出欠を問い合わせいたしますが、今年も奮って、ご参加をお待ちしています。



2014年度
出席者アルバムより



nmosnmos 大阪社友会ニュース nmosnmos

平成27年度新年互礼会

編 集 部

恒例の新年互礼会を去る1月8日（木）午前11時に開催致しました。

146名のご参加を戴き、又、双日本社からも原副会長はじめ10名ものご列席を得て大変な盛会となりました。

林 靖会長の年頭の挨拶に続き、今年度目出度く米寿を迎えられた14名の方々に対するお祝い品贈答、双日からのご来賓 茂木副社長のご挨拶を戴いた後、梅田幾生さまの乾杯のご発声にて宴会に入りました。

宴会の途中で、山邑陽一さん、林 靖さん、内蔵田 卓さんから正月に相応しい詩吟のご披露があり華を添えて戴きました。

参加各位には充分楽しんで戴き、凡そ午後2時に無事閉会となりました。



会場；太閤園



『ミステリ小説断想』(2)

福 富 直 明



1. やっかいな凶器

新聞に『マディソン郡の橋』の作者がテキサスに住んでいて、「裏山をうろつくコヨーテやがらがら蛇とはうまく折り合いをつけている」と語った記事があったので、思い出した。

テキサスの西半分は乾燥し、緑も少なく、飲み水もざらついた感じがある。泊めてくれた知人は、時折、哲人的な発言をする男で、「この土地の生き物は、地を這うか、咬みつくか、棘があるものだけだ」と言った。地を這うものはがらがら蛇のことで、彼の隣人の家の居間には、インテリアとして全長2メートルぐらいのがらがら蛇の皮が壁に吊るされていた。皮だけになってみると、この蛇はみごとな菱形模様の持主であり、ダイヤモンドバックという別名の由来がよくわかる。2メートルの大物も珍しいが、子供たちの間では20センチぐらいの仔蛇が珍重される。と言っても、高値がつく訳でなく、こういう生まれて間もないのは見つけにくいので、捕まえたら自慢できるのだと聞いた。

しきりに泥棒に入られるスーパーの店主が頭に来て、夜、閉店後に店内にがらがら蛇を放し、翌朝、檻に戻す手段に出たとか。咬まれた泥棒がいたのか訊きそこねたが、あの店にはがらがら蛇がいると噂が広がれば、それだけで防犯効果は充分あっただろうと思う。もっとも、防犯に毒蛇を使うのは違法なのだという。過剰防衛なのか、動物愛護法に抵触するのか。

がらがら蛇が泥棒よけになったり、子供

の冒険の対象になったりするのはいかにしてもテキサスらしくて、都民の近くに鴉がいるのと同じ位、身近にいる生き物であり、「うまく折合をつけた」生活になるわけだ。

日本の作家が毒蛇を凶器に使った例は知らないが、江戸川乱歩の『続・幻影城』に収められている〈類別トリック集成〉を見ると、海外作家の短編には幾つかあるらしい。ドイルの短編しか記憶がなく、他の作家は未読なので、毒蛇取扱いのディテールをどう描写しているのか解らない。しかし、まず、どこで毒蛇を手に入れたのかという疑問が浮かぶ。昔は、入手経路をたどられずに毒蛇を入手する方法があったのだろうか。たとえば、現代の東京だったらと考え、ペット・ショップに電話して在庫はあるか訊いてみようかとも思ったが、真面目に相手をしてもらえそうにないので、止めた。仮に、毒蛇をこっそり在庫していても、いきなりの電話に正直に応待するはずがない。店頭での密売買はむりとなると、自らどこかの山野に踏み入り、野宿して虻とかやまかがし探してまわることになる。これも、目撃されないように行動せねばならない。そして、一匹、見つけたとしても、どうやれば、咬まれずに捕獲し、袋とか檻にいれられるのか。もぞもぞ動いているやつが入ったリュックをかついで歩くなんて、想像するだけでぞっとする。これを被害者候補のお宅まで運び、家人に気づかれないように効果的な場所に放すのも、簡単ではなさそうだ。

〈類別トリック集成〉には、毒蛇をステッキの中に隠す短編があるという。これなら持ち運びには具合良さそうだが、ステッキ

の中に押し込むのが難しそうだし、日頃、ステッキを持ち歩いた人でないと、目立ってしまう。

こう考えると、毒蛇を凶器に使うのは、いまや極めて困難な時代に入ったということになる。と書きながら、思いついたのは、ペット・ショップの店主が外来種の毒蛇にかまれて死ぬというストーリー。彼がひそかに飼っていて、それにうっかりと咬まれたと推測されたが、実は犯人が持ち込み、置いていったものだったというわけ。

でも、犯人がどこからそんな毒蛇を手に入れたことにすればいいのか。

2. 薬石の効

江戸川乱歩の労作〈類別トリック集成〉の嚙下毒の項に「毒薬ではないが、ガラスを細紛にくだいて、食物に混ぜる方法も屢々用いられる(一例、オーモニア短編)」という一行がある。

これを読んだとき、ガラスの粉(細紛は原文のまま)を使うなんて、すごいアイデアだなと思った。しかし、あさりやしじみの砂ぐらいの粒子だったら、嚙下する前にばれてしまうし、思いきり細かな粒子にしたら、果たして効くのかとも思う。

江戸川乱歩の文中の「屢々用いられる」というのが気になるが、小説の中で「屢々用いられる」との意味で、少なくとも、新聞で「ガラスの細粉による殺人」なるものが報道されているのは見たことがない。

そこで気が付く。新聞に出ないのは、(1)解剖しても死因不明の完全犯罪であり、いまだかつて一件もばれたことがないからであるのか、あるいは、(2)毒としては全然効かず、従って事件にならなかったからか。

英国作家のH. R. F. キーティングのインドを舞台にした『マハーラジャ殺し』(1980)では、妃殿下の侍女が「鋼より硬い、ととがったダイヤの粉末^{ダスト}」を手王宮へもどる。「少量でも、いざとなれば、人の命を

絶つのに充分」であり、「きわめて信頼性の高い毒物」なのだと作者は言う。なるほど、庶民階級だとガラスだが、マハーラジャとなるとダイヤモンド・ダストとなる。

これはキーティングの作家的空想ではなくて、マハーラジャたちの並はずれた生活と歴史をまとめた文献の中に、昔、バローダ藩王国で王族の1人が英人の政治顧問にダイヤモンド・ダストを嚙ませて暗殺しようとして発覚した事件の記述がある。この暗殺は成功したのか、未遂に終わったのか、また、どうして発覚したのか、詳細が書かれていないのだが、犯人は死刑になった。いかにもインドらしく、象に踏み潰されるという死刑だった。

他方、同じインドのマイソール藩王国のマハーラジャは、ダイヤモンド・ダストが媚薬の原料になると聞いて、先祖伝来のダイヤモンドをせっせと粉にさせたとの話も記述されている。薬効があったのか不明だ。

どうも、ガラスにせよダイヤモンドにせよ、毒にも薬にもならないような気がする。

かかりつけの医師とは、時にはちょっと雑談することもある程度の知り合いになっているから、ガラスの細粉を食べさせて人間を殺せますかと診療のついでに訊いてみようか。

3. 映画・小説の中の物価

ヒッチコック監督の1959年の「北北西に進路をと取れ」を観ていたら、ホテルでケーリー・グラントが5ドルのチップをやる。あの時代で5ドルは多いなと思ったら、どうやら主人公の性格描写だったらしい。チャンドラーの54年の『長いお別れ』でマローウがレストランの駐車係に渡すチップが1ドル、ローレンス・ブロックの2000年の作品の殺し屋はルーム・サービスに2ドルやってたから多かったかなと思う。ヘミングウェイの27年の短編「5万ドル」では手紙の郵便料金が2セント、ホテルのバス付きのダブルの部屋が7ドルから10ドル、

荷物を運んだボーへのチップは25セント。自分が勝てるわけないと思った疲れ果てたボクサーが試合の相手に5万ドル賭け、それが題名になっているのだが、試合が妙な具合に展開してはらはらさせる。乱歩の23年の「2銭銅貨」では5千人近い職工の給料が盗まれ、その総額が5万円。32年刊の『のらくろ上等兵』、36年刊の乱歩随筆集『鬼の言葉』がいずれも1円。36年の『怪人二十面相』のロマノフ家のダイヤ6個が20万円、37年の『少年探偵団』の〈黄金の塔〉に使った純金80キログラムの時価が25万円、98年の再版には、それぞれ「現代の4億円」「約5億円」と注がついている。32年のリンドバーグ家の誘拐事件の身代金が7万ドル、マクベインが59年に書いた『キングの身代金』の身代金が50万ドル、この小説を黒澤明監督が63年に映画化したときの身代金は3千万円だったが、2007年のTVリメイクでは10倍の3億円、71年の映画「ダーティー・ハリー」の身代金は最初の要求では10万ドルだったが、あとで20万ドルに吊り上げられる。天藤真の78年の『大誘拐』の犯人たちは5千万円要求するつもりだったのに、誘拐された当人に一喝されて100億円に変更する。この作品には「日本における人命の価値は交通事故の補償金を例とすると平均7千万円である」と出てくる。96年の映画「身代金」で200万ドルを要求された主演（メル・ギブソン）は、犯人には1文も払わない、誘拐に関する情報を提供してくれた人に200万ドル出すと宣言する。この映画は56年のグレン・フォード主演の「誘拐」のリメイクで、56年当時は50万ドルだった。ハメットの28年の短編「王様稼業」では東欧の小国の国王の地位が300万ドル、30年の『マルタの鷹』の鷹の時価が200万ドル、この作品の中で殺された探偵の生命保険金が1万ドル。私立探偵のマーロウの料金は39年から43年まで1日当たり25ドルプラス経費、49年になって40ドルと経費、同業のリュウ・アーチャーの63年の料

金は100ドルと経費。『マルタの鷹』に1000ドル紙幣のピン札10枚をもった男が登場。『長いお別れ』では5000ドル紙幣なるものが出てきて、米国でも5000ドル札は1000枚しか流通していないとの説明がつく。1000ドルとか5000ドルとかの高額紙幣はどこの店に行っても断わられて使い物になるまい。題名を忘れた映画だが、カジノで負けのこんだ男が財布の隅から小さく折りたたんだとおきの1万ドル札を取り出し、本物の紙幣かと騒然となる場面があった。36年のシカゴを舞台にした映画「スティング」（1973）で主人公たちがまんまとだましとった金額が50万ドル、フレデリック・フォーサイスの71年の『ジャッカルの日』のドゴール暗殺手数料も50万ドル、「シャレード」で4人の男たちが争う金額が20万ドル、トルーマン・カポーティが『冷血』で描いた強盗2人組が59年に4人家族を殺害して奪ったのが43ドル。

1984年頃だったか、当時副大統領だったジョージ・ブッシュ（父親のほう）といっしょに昼飯を食べたことがある。というと格好よく聞こえるが、ヒューストンでこっちが食べに行ったバーベキュー屋に彼も入ってきただけの話。男女のシークレット・サービス20人ぐらいたが店内を固め、店の表と裏にはパトカーや警官だらけの緊迫感。この店のランチ定食は4ドル95セント。そんなにこの店のバーベキュー・ランチが食べたいのなら、秘書に頼んで買ってもらえば、国費の節約になったのに。2003年に出版されたヒラリー・クリントンの自叙伝のアドヴァンスが800万ドル。

ちなみに前掲の天藤真原作の『大誘拐』の映画化作品はニチメンがプロデュースし、1991年の正月映画として公開された。

4. アメリカの陪審員

新聞に各国の陪審員制度が紹介されてい

たので、アメリカ映画の「12人の怒れる男」を思い出した。あの12人が評決に達するまで延べ何時間缶詰になったのか記憶にないが、責任感の強い人でないと勤まらない仕事だ。納税や投票と同じく、アメリカ市民としての義務の一つとして教え込まれているようで、社員が陪審員を勤めますからと休暇届を提出したら、会社は拒否できない。

アメリカだと、陪審員は一般市民から無作為に抽出されることになっているが、現実には、いささか度が過ぎると言いたくなるほど無作為なのだ。アメリカに赴任して2、3ヶ月経ったときに、陪審員にするから出頭せよという通知が来た。納税者ではあるが、市民権は持っていませんと回答したら、それきり何も言って来なかった。ほかの駐在員にも同じ出頭要請が届いたと聞いた。タイミングから見ると、運転免許証を取得したことと関係があるようで、運転免許をデータベースにしているが、当人の国籍どうなのかといった点は確認せずに抽出したとしか思えない。この大雑把さがすごい。

取引先の倒産から派生して裁判沙汰になりそうな事件があり、今後の心構えのガイダンスのつもりだったのか、弁護士が陪審員選出の手順を説明してくれた。原告が日本企業であるというだけで反感を持つ陪審員候補もいるかも知れない。弁護士はそういう偏向した人物は候補から外していく。相手側も同じように被告に偏見を持ちそうな候補を外していくのだから、数十人の候補を質疑した挙句、双方に不服のない12人に絞り込むだけでも、手間のかかる作業となる。

その弁護士は、現実的にはこの人を陪審員にしたら有利だとか不利だとか判断する基準はなく、その人の顔を見た瞬間の第一印象に頼るしかありませんよと言う。そう言えば、会合などで肯きながら聴いているから賛成してくれているのだと思ったら、本音は反対意見の持主で、肯くのはそいつ

の癖だった例もあり、短い質疑は当てにならない。幸いにしてと言うか、裁判にまで進展せず、陪審員選出に立会う機会はなかった。なんだか、面白そうな経験を逃したような気もした。

この弁護士の判断基準を他の弁護士に話したら、専門分野が違うせいとか、独自の意見を聴かせてくれた。陪審員に適しているのは、黒人、ユダヤ系、イタリア系の人たちだという。黒人はストリートワイズ（辞書によると「街の住人——貧民・浮浪者・犯罪者——」の事件に通じた、都市生活に心得のある）と意味）であり、ユダヤ系は泣く機会をいつも探しているし、イタリア系は一族のだれかがいつもトラブルに巻きこまれているから、検察側を敵視し、被告に同情的なのだと彼は言う。どうも、人種偏見的な見解のように聞こえるのだが、この人自身、父親はアイリッシュ、母親はイタリア系だったから、公平な観察なのだろう。

新聞によると、陪審員の日当は、州によって異なるが、5ドルから50ドルの由。

その昔、テキサスでつまらぬ事件の証人として法廷に呼び出されたことがあるが、そのとき、召喚状を届けに来たのがテングロン・ハットのシェリフで、交通費ですと言って1ドル置いて行った。バス代が無かったとか言って、出頭しない証人がいたようである。今なら5ドルぐらいか。

あのとき、シェリフが1ドルの領収書も召喚状を受け取った確認のサインも要求しないのが意外だった。最近、エルモア・レナードの小説を読んでいたら、主人公が召喚状や令状を手渡すのを職業としている男で、この男が、受取人の受領確認のサインは必要ないのだと言っている場面があった。事情によっては、相手が召喚状の受け取りを拒否したり、暴力をふるったり、サインを貰うところではない場合もあるので、相手が当人であることを口頭で確認するだけでよいということらしい。

国民性(エートス)と国民感情(パトス)について(その三)

竹 内 可 能

負のパトス (pathos) 考

前号まで長々とエートス (ethos) のことを書きつづってきた。安倍首相の靖国神社参拝に疑問を覚えたことから、この国とこの国のかたちのことをあらためて考えて見たいというのが動機であった。書いているうちに気がついたことだが、テーマが宗教や思想に飛んでしまいがちなのは、どうしても靖国神社のことが念頭を離れられないからであった。

私は思うに政治というものは人間集団のごく实际的(現実的)な統治の営みであり、これに対して宗教は神による人間一個人の心や魂の支配であろう。古代ギリシャ・ローマの時代から今日まで、人間の歴史(文明)が政治と宗教の分離をめざしてきたのは、政治が人間の魂を支配することの、そしてまた宗教が人間集団の統治にかかわることの危険を認識してきたからにはほかならない。昔からこの国には「触らぬ神に祟りなし」という諺があるが、一国の首相が公人として宗教(神)によって歴史(過去)に触れるのは、それ自体きわめて危険な思想であると思うからである。

哲学者ニーチェは彼独特のルサンチマン(resentment)という言葉を好んで使ったが、そこにありとあらゆる人間の「負のパトス」(pathos)が意味するものを投げ入れた。それが即ち「憎悪・怨恨・嫉妬・屈辱」などの感情であった。

これまで私が本誌でエートス(国民性)のことにかまけてきたのも、これに対比させてパトス(国民感情)というものの考察を通じて、やたら喧しい隣国どうしが投げつけ合うルサンチマンの源流に辿りつきたいためである。

ここに突然石原莞爾のことを持ち出すことをお許し願いたい。あの満州事変の首謀者だった旧軍の将官である。その彼は後に上官だった東條英機の忌諱するところとなり、それが幸いしてか戦争責任を問われずに済んだ男だ。彼が東京裁判で証言を求められ「太平洋戦争で最も責任を負うべきは誰か」という質問を受けた時のこと、その返答が振るっているのである。「それは米国のペルリ(ペリー提督)である。無理やり開国を求められなければ、この国は今も平和をむさぼっておったろう」と。

人を喰った話だが、私はこれを読んで日本人の「負のパトス」を想い、嗤って済まされないことに気づいたものだ。情念とか怨念の世界のことである。それはそうなのだ。ペリー提督の黒船の来港にはじまる開国から不平等条約そして太平洋戦争開戦にいたるまで、この誇り高い国が被った屈辱の数々は筆舌につくしがたいものがあったろう。それは米国をはじめとする列強に対する屈辱と怨念の歴史だったと考えてもよいのではないか。そうだとすればこの国はかれこれ百年という年月、列強国に対する「負のパトス」を心の底にしまい込んでいたのだろうか。なぜこんなに想像をたくましくするのか。

大陸と半島に於ける「負のパトス」

私は今お隣の中国大陆と朝鮮半島の「負のパトス」を考えようとしている。彼らが片や日清・日中戦争で、片や日韓併合などで被った屈辱と怨念のことである。くすぶり続けてきた火に油が注がれるようにして、それらは燃えさかる炎となり今も日本列島に襲いかかる。

私は今このような大陸と半島から襲い来

る屈辱と怨念の炎を見上げながら、かつて日本が列強に対して抱いた同じ「負のパトス」のことを考えていたのだ。

日清戦争（1894）に勝利し、日・ロ戦争（1904）をкаろうじて切り抜け、相前後して関税自主種権も回復したとき、この国もようやく積年の屈辱を払しょくして、一種国際的な優越感にひたることができたかに見えた。しかしそれが列強に対してのものというよりも、主に中国大陆と朝鮮半島に向けられたものだったことは明らかなようであった。日本は列強に対する積年の屈辱と怨念（負のパトス）の投げ棄て場を、あろうことか近場でお誂え向きの大陸と半島に見出したようなものだ。日韓併合（1910）、そして中国大陆への侵略開始（1937）がその極め付きだったことはここに言うまでもない。

日本の言論界には今もなおかつてのこの国の大陸や半島への侵略は、侵略には当たらないという論説が静かに根強い。過般の首相の靖国神社参拝も、国内外の異論を押し切ってまでの敢行が意味するものは、かつてこの国の大陸や半島への進出が侵略には当たらないとする、神々にかけた含意が込められているのではなかろうか。世界の輦蹙を買うことになるのはその故と思われるのである

侵略否定とも正当化とも受け止められる論議のなかには、あの当時なら他の列強国でも似たりよったりか多かれ少なかれ同じような植民地化を働いていたはずだとか、もし日本が行って助けの手を差し伸べなかったら相手国はもっとひどいことになっていたのではないかと、あるいはまたもし日本が出ていかなかったならロシアの進出を許すだけではなかったのか、といった言い訳がある。

私は今、国民感情とりわけ中国大陆や朝鮮半島が、先の大戦で日本列島から種まかれた負のパトス（ルサンチマン）のことを

考えている。

これらの地に日本軍が侵攻を始めたときのそれぞれの国、清朝と李王朝の文字通り末期的な混沌（カオス）のことである。多くの日本人の侵略に対する言い訳の底流には、このような両国の当時にあつて国の体をなさないような末期的症状があると思われるからである。清朝と李王朝の末期を同日の下に論じる非は寛容願うとして、しかし両王朝とも時あたかも私がいうところの、「易姓革命」的な回天の時期を迎えようとしていたとしてもよいのではなかろうか。

悲劇にはいつも不運の重なりがみられる。片や日本は明治維新の開国を乗り越えてまがりなりに興隆の氣運のまっ最中にあったが、そのとき大陸と半島とは共に運命的な回転（回天）のカオスの中であつた。こうして時に乗じた日本の軍部は「易姓革命」よろしく、両王朝に代って（易姓して）天命を拝するところまで夢見たにちがいない。あの満州出自の少数民族だった女真族が漢族を征服して清朝を打ち立てたとすれば、我（日本民族）にして出来ないはずはないなどと。

私はこのような悲劇を一身に背負わされた大陸と朝鮮半島の民族の哀しみと負のパトスの痛切を思わざるを得ないのである。

「いじめ」の論理

「いじめ」（bullying）はあらゆる人間集団の中に見られるが、明らかなことは

健全な精神の持ち主とは無縁のものであることだ。それは屈折した弱者の精神の持ち主だけが、己よりさらに弱者と見立てた者に限り、これらの者に加える危害のことである。加害者はこうすることで、被害者に対して隠微な優越感に浸ることができるところに、「いじめ」の本質があるといえる。

今日大陸や半島から引きも切らず浴びせかけられる負のパトス、つまり対日憎悪と

怨念（ルサンチマン）の執拗さを目の当たりにするとき、私はかつて戦前のことだが、日本がこれらの国々に加えた民族蔑視の国民的な異様を思わざるをえないのである。そしてあの当時われわれ日本人による、あのような全体主義的な民族蔑視には、まさに言わんとするところの陰湿な「いじめ」の論理が働いていたのではないかと。

私は今でも思い出す度に心苦しさを覚えるのだが、かつての日本人の大人たちが（子供たちまでが）支那人とか朝鮮人とか言い立てながら、激しくこれらの人々を侮蔑してはばからなかった、あの異様な日本人の心の闇のことである。

大日本帝国だった当時の国民は、折しも明治維新期を通じてなしとげた文明開化に乗じて民族興隆の気運にはあったが、列強にたいする負のパトス、件のルサンチマンのマグマがすっかり解消したのかといえばそうではなかった。彼ら日本人は文明開化と富国強兵はともかくとして、開国の後遺症から完全に解放されたわけではなかったのだ。そのとき彼らはこうしたルサンチマンのすべて（憎悪・怨恨・嫉妬・屈辱）を脱ぎ捨てようとしたその足で、隠微な優越感（superiority complex）を求めようとした先が、よりによって近場の大陸と半島だったということではないか。ここに「いじめ」の論理が働いたのである。

歴史の不運を私がいうのは、このとき日本人が大陸と半島に見て取ったものが、開国というバスに乗り遅れた周回遅れの弱者（後発国）の姿だったことである。事実はこのような状況の下で、まさに「いじめ」が国民的な民族蔑視にはじまり、ついには国家的な「侵略」へと突き進んでいったのであろう。

大日本帝国の崩壊が、天皇神格化と統帥権のひとり歩きがもたらした軍部独裁による戦争への暴走に帰せられるとすれば、それらの精神的な背景として動員されたもの

に、件の大陸や半島にたいする国民的な「いじめ」の論理があった、とするのが私の歴史認識である。

これはドイツ帝国の滅亡が、ヒットラー総統の主導のもとに過激な国家主義・全体主義、すなわちナチズムなる自爆装置によるものであり、その精神的な背景にあったおぞましい民族浄化・ユダヤ排斥の思想と思い合わせて見るとき、あらためて一時の国民感情つまりは陰湿な国民的「負のパトス」という、魔物のようにグロテスクな符号の恐ろしさに突き当たる。片や「鬼畜米英」なるルサンチマンに発する開戦、悪夢の原子爆弾投下、そして敗戦、片やヨーロッパの歴史がユダヤ人に抱き続けてきたルサンチマンの行き着く先、あの世紀の断末魔「ホロコースト」であった。

報復的ルサンチマンの連鎖

かくてわれわれ日本人はあらためて思い知らされるのである。

今日大陸と半島にまたがる両国が、今なお容赦なくわれわれに叩きつけてくるルサンチマン、対日憎悪と怨念の激しさは、上述のような戦前の日本が彼らに加えてきた、異様なまでに執拗な「いじめ」（民族蔑視）と「侵略」にたいする仮借なき報復であることを。

折しも尖閣諸島と竹島といったさなきだにやっかいな領土の帰属問題が、いやが上にも日中・日韓の双方にくすぶり続けてきたルサンチマンの火に油をそそぐ。そしてここにいきなり靖国神社参拝を掲げて登場してきたのが、安倍首相であったから世界は騒然としたのである。首相は業を煮やしたのであろう。いつまでたっても鳴り止まぬどころか、ますますけたたましい報復的対日ルサンチマンの叫び声に。こうしてルサンチマンの連鎖が始まったのである。

靖国神社参拝ということが、報復的ルサンチマンにたいするに隠微だが有効な手段

であることを、首相は十分計算していたであろう。なぜならこの神社こそ戦没者という神々の祀りに込められた含意が、侵略と東京裁判の全否定であることは明々白々だからである。米国をも含めて世界が騒然としたのもこの故だったのだ。

首相はこの靖国神社参拝を、「戦後レジームからの脱却」という彼の掲げる政治目標の一里塚に見立てているふしがうかがえる。しかしもしそうだとすると、私はこれこそ国家にとって危険を弄ぶがごとき政治と宗教の混淆ではないかと危惧している。繰り返すまでもないことだが、「政教分離」は現代文明が到達した見識であり現実である。あの戦争そのものが、そしてその犠牲者が祀られる神社そのものが、未だに物議の渦中とあればなおさらのことである。戦争犠牲者の霊が、公人としての政治家の恣意によって、特定の「神社」に祀られるべきではないことは言うを俟たない。

首相が「戦後レジームからの脱却」を言うとき、私はその脱却して向かう先が、どうしても「戦前レジームへの回帰」ではないか、という錯覚にとらわれてならない。杞憂でなければと願いつつ、しかし最近の中国要人の危なっかしい政治的言動を見る

[illegible]

につけ、習主席の導く方向が日本の戦前歩んだ道とそっくりそのままの、私が負のパトスと呼んできたルサンチマンの裏返し、傲慢と覇権主義ではなくて何なのか。

それは旧日本軍が夢見た「大東亜共栄圏」と、現在の中国政権がくりだす「大中華民族」思想の間にただよう、奇怪なアナクロニズム（時代錯誤）の連関であり、安倍首相の「戦前レジームへの回帰」と習主席の「日本の戦前回帰」が、バッティングを起こしかねない悪夢のことである。

「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に」と言ったのはイエス・キリスト自身であった。この言葉は奇しくもイエスの降誕と同時期ローマ帝政の皇帝アウグストスの治世下、皇帝と神の狭間で苦しんでいたユダヤ人に向けられたものだが、爾来「政治と宗教」が峻別して取り扱われるべき、歴史的教訓のはじめである。

私は思うのである。安倍首相ともどもわれわれ日本人は、今こそ己の手で自らを靖国神社の呪縛から解き放つべき秋（とき）ではないかと。戦後レジームからの脱却は、まず靖国神社からの解放をもって嚆矢とすべきことを強調して本稿を脱したい。

(おわり)

インド 雑感 - 7

高尾勝

2014年5月の総選挙でNarendra Damodardas Modi 人気でBJPが圧勝しModiが首相に就任して1年が経つ。インドの市場価値が世界的に認識され始め、この処 邦紙の特に日経新聞のインド関連記事が増えており、五月の連休には宮沢経産相が訪印して、現時点でのインド進出日系企業1,200社を2,000社に増やすための諸方策、日系企業専用工業団地設立などをインド側と打ち合わ

せ、今後5年間で日本からの投資額を倍増する Action Plan（約3.5兆円）に調印したと報道されている。

インドの経済発展は間違いないが、今後
も紆余曲折を経ることも間違いなく、その
要因などを挙げつつ、インドの今後を展望
してみたい。

1. RSS, BJPとModi

インド民族運動の流れの中でK. B. Hedgewarが1925年に創ったRashtriya Swayamsvak Sangh（民族義勇団）はヒンドゥー社会の民族意識醸成と相互紐帯の強化をめざし、印パ分離時にその組織力と規律性で難民救済の場で名を上げたが、その右傾化も免れずインド独立後の1948年Mahatma Gandhi暗殺関与の疑いで非合法化されたこともある。1950年10月政党Jan Sangh（大衆連盟）設立、現在のBJP（Bharatiya Janata Party）に到る。

RSSは傘下にヒンドゥー至上主義の世界ヒンドゥー協会（VHP）などを抱え、各分野で宗派主義活動を展開している。

Modiは青年期の数年間RSS団員として活動し、その後BJPに入党した。DelhiのBJP党本部事務局長（複数）に昇進したが、その言動で出身地Gujarat州に下放され2001年51歳で州首相に就任。

2002年2月27日Gujarat州Godhra駅でヒンドゥー巡礼者団の列車に対する放火殺人事件が発生し、3月1－3日のムスリムへの襲撃事件、約1,000人死亡、避難流民約20万人発生と云うGujarat大暴動事件を誘発した。暴動鎮静化にModiは手を拱き中央政府が軍隊を派遣して鎮静した。この為に、米国は彼に対する旅券発給を拒むなど、Modiは州内を除く内外の悪罵を蒙った。

暴動直後の2002年、続く2007年、2012年、

ModiのBJP Gujarat支部は州議会選で3期連続勝利を収めた。この間、Modiは為政者として大きく成長したようで、州内ムスリムとの融和、停電皆無実現など州内のインフラ整備に努めて企業誘致による工業化を進めてインドに於ける所謂“Gujarat Model”を創り上げて、インド国民が待望する首相候補の筆頭にのし上がった。この雰囲気背景にModiはBJPの総選挙対策委員長、更にはBJPの首相候補に正式指名を受けて着々と地歩を固めた。総選挙対策委員長に就任するや、Gujarat時代からの腹心Amit Shahをインド最大の選挙区で全国への影響力があるUttar Pradesh州に派遣して選挙対策を執らせて大成功を収め、2014年5月の総選挙はBJPが単独過半数の282議席、連立与党53議席、合計335議席の大勝利を齎した（下院は選挙議席543、大統領指名学識者2名、計545議席）。

総選挙後、BJP党首Rajnath Singhが任期半ばで党首の地位をAmit Shahに譲り、内務大臣として入閣した。此れに依りModiは行政と下院で絶対的な権力を手中にしたが、野党が過半数を占める上院での野党の反抗、右翼の跳ねかえり分子に悩まされてきた。

2. Modiの基本政策とその効果

Modiは開発（Development）で経済発展を図る事を基本にした市場経済主義者で、社会主義の色彩が濃い会議派と大きく異なる。



India's prime ministers

Gujarat州首相として、強権を振るってインフラ整備に進め、ストを禁止する一方、自ら積極的に企業誘致に努めた。その典型例が西ベンガル州で地域政党と農民の抵抗に手を焼いたTata自動車の工場をGujaratに移設させ、スズキの子会社マルチ・スズキ自動車のManesar工場で死者が出たストライキ騒ぎの直後Modiは浜松に赴いてGujaratへの進出を勧誘して、スズキが州内の2カ所に進出した、ことである。

農政の面でも、灌漑を整えて花卉栽培、野菜栽培などを奨励して、Gujaratの農業生産をインド有数のものに押し上げたし、民政面では、低所得者層への単なる施しは自立阻害要因と見做して就労意欲喚起、宗派主義を排して住民に対する機会均等を徹底させた（高級住宅街からムスリム追い出しを煽動したVHP Gujarat支部長を逮捕したことあり）。

国政を担当してからの彼の内政面でのキーワードは「清潔なインド」と「インドでもの創り」。前者は物理的な清潔さと汚職追放を引っ掛けたもので、後者は外資を惹き込んでインドでもの創りの土壌を涵養し技術定着・向上を図ろうとするものである（自動車産業に倣って）。日本の士・農・工・商に対比されるインドの四種姓は 僧・武士・商人・農民（農奴）であり、もの創りの「工」は含まれておらず、インドではもの創りは侮蔑されていた。

このようにModiの経済面での基本政策は親生産業であり、生産業育成の為の諸方策を実施しようとするものであるが、前項末尾に述べた障壁が立ちだかつており、手を変え品を変えて一つ一つ乗り越えつつある。

例えば、会議派主導前政権の環境省が立ちばかり、鉱区割当ての汚職、土地収用法、などで石炭増産まみならず、電力の70%を石炭火力に頼るインドの電力不足解消が

進まなかったが、Modi政府は2020年までに石炭生産を現在の倍15億トンにする計画を明らかにしている。

会議派主導UPA政権第一期の後半2008年前後のインド経済成長率は8%前後で推移したが、第二期はManmohan Singh 首相の指導力不足もあって汚職蔓延、政策麻痺で経済不振に陥り、2013 - 14年の経済成長は約4.5%に低下した。

Modi登場でインドの経済成長は回復に向かいつつあり、4月29日に世銀は2015 - 16年の成長率は7.5%、2017 - 18年は8%と予測発表している（経済成長下降気味の中国を逆転）。

外交政策は経済政策とも密接に関連するが、Modiは完全に西側向けに舵を切った。首相就任後の最初の外国訪問はブータンだが、本格的な外遊は彼の日本最良を反映して日本が第一番目だった。次いで2014年9月紐育での国連総会に出席したModiを異例なことだが米政府が賓客として華府に招いて首脳会談で核物資民間取引協定など懸案事項の解決を協議した。米印関係密接化の象徴が今年1月26日の共和国記念日のパレードに米国大統領として初めてObamaが主賓登場したことである。因みにUPA政権下の2014年のパレードでは安倍首相が主賓だった。

4月9日から9日間で仏・独・加を訪問、仏では2012年から交渉中だったダッソー・アビアシオン社の戦闘機36機購入交渉を纏



U.S. president
Obama and
India's p. m.
Mr. N. Modi

AFP

め、原発技術支援を取付けた。「インドでもの創り」の一環として戦闘機90機をインドで製造すべく仏と交渉中。独ではHannoverで産業見本市を訪れるなど産業界との会合に多くの時間を費やし、カナダでは5年間で3,200トンの濃縮ウラン供給の契約を纏めた。今回の訪欧で対印投資の数値的な合意は引出せなかったが、先送りされてきた幾つかの交渉を速やかに纏めたことをインドメディアは大きく評価している。5月中旬には中・韓・モンゴルを初めて訪問予定である。

3. Modiの政策遂行にとっての障壁

(1) 右翼跳ね返り分子の妄動

2014年の総選挙を勢力挽回の好機と見做したRSSは各地で活動家を動員してBJPと協働した。BJPの大勝はModi人気の所為であるが、これに勢いを得た右翼の跳ね返り分子は国民の反撥を呼ぶ行為を公然と執拗に繰り返した。その典型が‘reconversion’（ヒンズー教への改宗運動）であり、昨年末のMahasabhaグループに依るMahatma Gandhiを暗殺したGodseの胸像樹立計画であり、外国人の家庭内にまで聖牛が入りこみ対印投資に影響しかねない、Haryana州議会が今年3月16日に承認したcow protection lawである（尤もこの聖牛保護法実施は大統領の承認を要する）。

目下RSS自体は跳ね返り分子抑制に応じているが、RSSの理念とModiの政策は全面的に習合するものではないので、両者の理性がポイントになろう。

(2) 上院のねじれ構造

インドの上院（総議席245）は、州政府が上院議員を送込む制度になっており、州議会選挙が国政（上院）に影響するシステムになっている。2014年末の時点でBJP議員は42名であり、Modi政府が上下院の捻じれ解消するには数年を要するであろう。昨年末の冬季国会、政府の国会運営の拙さもあって上院の野党は結束して改宗問題を楯

に主要法案の審議を混乱させた。

(3) 連立与党のしがらみ

BJP自体で下院単独与党であるが、幾つかの州での同盟パートナー達の行動の結果責任を負わざるを得ない立場である。同盟者たちが政府の方針に反対でなくても、地域事情に基づく彼等の行動が国家レベルで動くBJPを痛める。牛歩審議を防ぐ手立てに失敗し国家的見地で当惑な状況であることをはしなくも2月の予算国会が見せた。

(4) 性急な国民の期待

右翼跳ね返り分子の活動に国民が眉を顰め、国民の関心を国政から引き離して情緒的なものに転化し、その結果Modiの統治に対しても性急に結果を求め寛容さに欠ける全国的雰囲気醸成しつつあった。Modiの訪日、訪米、に続く4月の訪欧・加結果をメディアが連日称賛して、国内のModiに対する評価も再びうなぎ上りになった。

4. Modiと政府の変化（成長）

仕事を通じて、Modiと政府は限界を、更には譲歩の意義を悟り、傲慢さを払拭しているようである。その兆候は；キリスト教徒のイベントに参加して信仰の自由を保証、

UP州政権に在るMulayam Singh Yadav一族の慶事に参列、国会担当相Venkaiah Naiduを予算国会前にSoniaの下に訪問させた、宿敵西ベンガル州首相Mamata Banerjeeと面話し過去を水に流したこと。Modiは新しい人となりを見せている。

立法の場で野党挑戦の内容・規模を理解して、上院での反対党を地域別に区別する試み、

時間的制約付特別委員会に法案付託する、などの戦法を試みている。

Modiとチームがどれだけ学び、どれだけやり方を変えるかが、インドの政治・経済の変革をどれだけ実現できるかを規定することになろう。

◎ Speak-up ⇒ Engineering (創造)

浜 地 道 雄

今は昔となってしまったが、ニチメンのサウディアラビア・リヤド駐在時、アラムコへの出入りはexcitingだった。

Arabian American Oil Companyの名前のおとり、サウディアラビア政府と米系4社の合弁だった。

(現在は100%国営となり。Saudi Aramco = Aramku al-Saudiyahとなっている。)

その頃にお世話になった日揮のグループ代表の重久吉弘氏が、日本経済新聞社の朝刊連載コラム「私の履歴書」、2月号に登場している。

同コラムは、各界で名を挙げ功をなした人の赤裸々な個人情報も含む文字通りのPersonal History個人史だし、resume (仏) 或いはいわゆるC.V.ラテン語のCurriculum Vitae人生の物語だ。

重久吉弘氏の「海外開拓：ささげた人生」は、多くの示唆に富む。

中で、「英語」という点で、参考になることが多い。

そこでの一貫したキーワードはエンジニアリングEngineering。

エンジンEngineとはラテン語in- (中に) gignere (生じさせる、産む) だ。

ロンドンのハイドパークにあるAlbert Memorial Towerは1851年の世界産業博覧会の記念碑だ。

その土台のところに4つの大理石像があり、Agriculture、Commerce、Manufactureと並び、その一つはEngineeringと名付けられている。19世紀の大英帝国を支えた基礎を象徴している。



Wikiより ENGINEERING

日揮JGCとは日本揮発油Japan Gasoline。即ちガソリンのこと。JGCは重久氏が入社した1961年には社員500人の国内事業。

それが今や約一万人、内半分は外国人というグローバル会社に成長した。

入社二年目の重久青年は、生まれて初めて飛行機に乗り、香港で顧客(Mobil石油)に英語でプレゼン。

「LPGタンクを作れるか？」と聞かれて、無知のまま「Why not?」と答えたのがきっかけ。

設計部門から散々怒られたが、何とか受注。日揮の海外事業の嚆矢となるものだった。

帰国子女でもなかったその英語力は慶応義塾大学の英文学科での勉強ゆえ、話せたわけではない。

英会話学校にて「テキサスなまり」を習ったよし。そこでは「何より外国人と会話する度胸がついた」とのこと。これがだいじだ。

その後、日揮は南米の大型案件を受注。

さらに、インドネシア、中東産油国市場に拡大していく。

アルジェリアでは、2013年1月の襲撃事件にもめげず、社員がもう一度立ち直すチャンスとして以前にも増して海外プロジェクトに意欲を燃やすようになったよし。

とりわけ、「国際ビジネス」に携わる者への励ましは「Speak-Up話しかけ」だ。

2010年11月。横浜で開催されたAPEC首脳会議のレセプション会場に米オバマ大統領がいた。

誰も話しかけようとしな。重久氏は引きつけられるようにして「Mr. President」と思わず話しかけた。Speak-up!

一瞬きょとんとしたオバマ大統領はすぐに笑顔になり、仕事の紹介から始め、話は盛り上がったというのだ。

同会場では韓国の李明博（当時）大統領とも昔話に花が咲いた。別の機会ではシンガポールのリー・クアンユー元首相から中国ビジネスの要諦は「親友をもつこと」とアドバイスを受けたこともあった。こうして多国籍プロジェクトにおけるスピーク・アップの重要性を認識させられた、とのこと。

「履歴書」の終段では、社内エレベータで乗り合わせる多国籍の人たちに「どこの国



オバマ米大統領と握手（写真提供：日揮）

から？」とSpeak upする。世界の人々は共に生き共に発展してく、と締めくくられている。

まさにエンジニアリング＝創造である。

*一般社団法人日本在外企業協会「月刊グローバル経営」（2015年4月号）より転載・加筆。

「番外:回顧50年」

浜地 道雄

6月2日、偶々、東京駅八重洲口の地下街で、「50周年」という小旗に気が付いた。



「!?」と思って歩くと、懐かしい写真展。

何と、1965年（昭和40年）6月1日の開場、まさに筆者の日綿入社の日だ。

入社試験を受けたのは日本橋室町の近三ビルだったから、なるほど、自分の入社に合せて、八重洲の新ビルで迎えてくれたのか、と妄想をする。

ともあれ、Freshmanとして胸を膨らませて毎日通ったこの（地下）道。

あれから50年、本当に色々あったと感無量だ。

その展示で、「八重洲」という地名が、1600年（慶長5年）、帆船リーフデ号で日本へ漂着したオランダ人「ヤン・ヨーステン/耶楊子（やようす）」に由来と知り、人の歴史の感慨がさらに深まった。

書評

「イスラム国の正体」 国枝昌樹 著 朝日新書

澁 谷 義

過激派組織「イスラム国」は、フリージャーナリストの後藤健二さんと会社経営者の遥菜さんを殺害したとインターネット画像で公開した。後藤さんの母、石原順子さんは、「健二は旅立ってしまいました。あまりにも無念な死を前に、言葉が見つかりませんと声を振り絞るように話した。湯川遥菜さんも殺害され、余りにも酷い。

「イスラム国」という「国家」がその存在」を一方的に宣言したのは、2014年6月29日のことでした。それまではISILという団体名でしたが、「建国」後に英語ではIS (islamic state)、日本では「イスラム国」という名称で呼ばれています。現在、イスラム国は最も世界で残虐な行為を重ねるイスラム過激派といわれ、盛んにその非人道的行為が報道されています。とくに人質となった欧米人の首切り動画は、世界中にショックを与えました。オバマ大統領は、国連総会で「世界の脅威となったイスラムは、人類が直面している脅威・課題」として、「憎むべき殺人」「断固とした行動を取る」と、このカルト的テロ集団の壊滅を改めて宣言した。安倍内閣は、後藤さんと湯川さんの救出に失敗したことを踏まえ、事件への対応を検証する方針だ。身代金2億ドルも期限過ぎて、救出の糸口もつかめず、上記のような悲劇になってしまった。

以上は最近の新聞やテレビなどの報道の要旨である。

表題の著書「イスラム国の正体」の概要を以下記してみる。「イラク、シリアの混乱

に乗じて2014年から台頭したイスラム国。首切り、奴隷市、虐殺などのショッキングなほか、SNSを駆使した巧妙なPR戦術で、世界中の若者が惹きつけ、参入している。謎に包まれたイスラム過激派に迫ると、冒頭に記している。

一躍、世界の脅威となったイスラム国ですが、これまでの過激派、テロ組織と大きく異なるのは、次の3点です。1) 国を名乗り、領土を主張し、行政を敷いていること 2) インターネット上で効果的にメッセージを発言していること 3) 欧米人を含む外国人の参加が多いこと

著者は1978年に在エジプト日本大使館一等書記官、1989年に在イラク日本国大使館参事官、1991年には半年ほど在ヨルダン日本国大使館参事官を務めた。

1978年8月2日にイラク軍がクウェートを軍事占拠して始まった湾岸戦争では、小銃を突きつけられた司令官と交渉し、日本人の人質解放に当たった。

イスラム国は名称を変えながら、イラクとシリアの反対制過激派のひとつとして、政府軍を相手に自爆テロや武力闘争を継続、2014年になって一気に支配を拡大した。

指導者は「カリフ」という称号をかかげる。カリフとは代理人・後継者という意味で、すべてのイスラム国家の最高指導者という意味を含んでいる。イスラム教には、遺体を損傷してはいけないという教えもあるはずです。ところが、イスラム国は遺体を損壊してしまいます。

書評

**「脳についてわかったすごいこと」 文藝春秋四月号 立花隆
ナビゲーター 岡田朋敏 NHKチーフプロデューサー**

澁 谷 義

六カ国21人の専門家に聞いた。

- 1、死の瞬間になにが起こるか
- 2、見たい夢を見る方法がある。
- 3、死後の世界はある
- 4、親鸞の死のイメージは世界中に存在する

「意識とは何か」という問いは人類最大の謎であり、現代の脳科学者に」とっても最もホットな話題になっています。人が考えたり、感じたり、思いめぐらしたり、迷ったりするのは、当たり前のことですが、その時一体どんなことが、脳で起きているのかは大きな謎でした。古代ギリシヤ以来の、哲学者が思いめぐらしたその謎を、いま科学的に解明しようと世界中で研究が進んでいます。臨死体験とは、病気や事故で死に瀕した人が、意識が回復したときに語る不思議な視覚体験です。体験した人の多くが、自分の魂が体から抜け出したような、いわゆる体外離脱と呼ばれる現象を味わい、三途の川や花畑の中を歩く。そこで全知全能の神のような超越した存在に出会い、幸福な気持ちに包まれる、このような臨死体験は、古今東西、年齢や人種を問わず数多く報告されています。

意識輪の草分け一人である脳科学者のクリストフ・コッホは、脳科学研究をリードする世界のトップクラス脳科学者です。コッホは、DNAの二重らせん構造を発見し

てノーベル賞を受賞したフランシス・クリックとともに、1980年代後半頃から「これからは脳科学の時代、意識の科学の時代だ」と言い始め、現在に至るまで、ずっと意識研究をリードしてきました。驚いたのは、いま、アメリカ、ヨーロッパではヒトや霊長類、ネズミの脳の細胞や結合状態を全て分析する計画が次々と進められていることです。

意識にかかわる細胞や物質はまだ特定されていません。脳研究の最大の謎です。コッホは「脳の働きは、脳の神経細胞が作る回路の働きを総合したもの」という脳科学の伝統的な考え方もとに研究してきた人です。どの神経細胞にどういう信号が流れて、そのときにどういう意識現象が起きるか、それを微細に読み解く作業をしてきた。つまり神経細胞の働きと、脳の中で起きている意識現象との相関係をとことん調べることによって、物質的な脳が意識を生む不思議さを解明できると考えた。

脳には、千数百億個、千種類以上もの神経細胞がある。神経細胞は「ニューロン」とも呼ばれ、その先端の突起が別の神経細胞とつながりあい、電気信号を発して情報をはりとりしている。コッホは脳のどこかに解明のカギとなる「遺伝子」のようなものがあるはずと考えています。



『大建さんの<志>』 ……歌集「風の回廊」を読んで……

編集部 (K.T.生)

前号（会報17号）の会員寄稿文のなかに、本誌編集主幹の長谷川 洋氏によ

る『歌集「風の回廊」を読む』と題する、本会会員の大建雄志郎さんの歌集の紹介文があった。

当編集部 (K.T.) としても、正直なところ商社マンO Bのなかに、このような歌集を上梓される歌人の存在を知って大いに興味をそそられ、後日にわたることながら当の長谷川氏にお願いしてその歌集を見せてもらったのである。手にしてみると仕上がりも美しい装幀のもとに、みずみずしい大建さんの一連の秀歌がちりばめられていることにあらためて驚かされた。既にその一部はこの紹介文でもご披露されている通りであった。

今また私たち編集部が「風の回廊」を取り上げたのは、大建さんの歌集の鑑賞もすることながら、巻末に添えられている今野寿美さんという現代短歌界に著名な歌人がものされている推奨文、題して『大建さんの<志>』であった。

この一文が私たちに身に染みて思われたのは、戦後を駆け抜けてきた多くの商社マンがそうであったように、海外勤務に明け暮れしながら御国のため、会社のため妻子のためにと、身を粉にして働きづくめで通してきたエヴリマン氏の哀歓ではなかったか。今野寿美さんという優れて歌人特有の感性と詩情が、大建さんという商社マンO B氏の心の襞を読み取って綴る一文に、私たちは少なからず心を動かされたのであった。ここに大建さんを通じて今野寿美さん

御本人のご承諾を得、あえて『大建さんの<志>』全文を以下に転載させていただくゆえんである。

記

まるで仇討ちに出てくるような名前と言われ、小学校時代は悩ましかったと大建雄志郎さんは歌の中で回想している。なるほど堅固で、どこか厳かなお名前。<志>の一字に重みがあって、そこに仇討を連想したとすれば、小学生の感度もなかなかと感心したくなる。

仇討の連想こそしなかったが、わたしも一読して忘れがたく思ったお名前を初めて目にしたのは、新聞投稿歌のはがきの中でだった。作品にもつねに見どころがあり、筆跡とともに記憶にとどめたが、やがて当の大建さんが朝日カルチャーセンター・横浜の短歌講座にあらわれた。その頃には、大建さんが一紙ならず全国紙の各歌壇で実績をあげている方であるという世評も耳にしていた。やはり誰しも読み過ぎすことのないお名前だったらしい。ほどなくわたしどもの歌誌「りとむ」に加わられたときも、すでに多くの仲間にとっておなじみの作者であった。

「りとむ」や講座で読む作品から、大建さんの来し方はおのずと知れてきたが、商社の勤務が長く、日本の経済発展を前線で闘い支えてこられた方なのだった。同じ年代の男性のひとつの華々しい典型ともいえようけれど、企業戦士などと揶揄されることからして、凄まじい勤務の現場を経てこられたことが察せられる。とはいいいながら、大建さんは、そのような激しい時間に身を置く一方、そのさなかも生来の文学志向を

みずから大切に保った。もともとロシア語を修めるなかでチェホフの作品に強く惹かれていたという。十一年にもわたるソ連時代のモスクワ駐在の間は必死の思いで勤務をこなし、家庭生活も築きながら、文学作品に心を委ねるゆとりを持とうとされた。おりおりに原典に接し、ロシア文学を理解するにこれ以上ない生活環境を意識的に受け容れ、自身の文学観も深めてゆかれたのだと思う。

それはもちろん、幸福ななりゆきだったといえるだろう。それにしても、大建さんの<志>なくては始まらない。大建さんがそうして得られたことを含め、役職を退かれたのちの待望の表現活動にすべて反映させ、生かされたことは、一人の人生の流れとしてもすばらしい。

大建さんはロシアに限らず世界史や外国文学に詳しく、講座でご披露いただくことも少なくない。そもそも、わたしなどチェホフと思っていた名が、一般的な表記としてはチェホフであることを大建さんの作品から教えられたのである。あらためて辞書に当たってみると、いずれも見出し語はチェホフとなっていた。ロシア語の発音としてチェホフであることを言いつつ、大建さんはチェホフであってもかまわないと柔軟な姿勢を示された。歌集『風の回廊』で、大建さん自身二通りに詠み入れているが、これは短歌の韻律に乗せる意味での配慮によるのであろう。

大建さんにはずいぶんいろいろ教えていただいた。どの作品に端を発していたかはもうしわけないことに憶えていないにもかかわらず、帝政ロシアの怪僧ラスプーチンの話は今でもよく思い出す。暗殺するにも手こずるほどの怪物だったという男である。そのゆえに、以降ラスプーチンを名のる者なく、ラスを切り離してプーチンとなったのだとまことしやかに語られたりもするのを聞いて、大いに興じたのだった。

またこれも何がきっかけであったか、イ

ギリスのヘンリー八世の話に及んだ。王妃を代えること六人、うち二番目と五番目の王妃を断頭台に送った国王である。その二番目の王妃の子孫が今の王室であるとか、ロンドンの学校では六人の王妃の名を順番どおりに覚えさせます、という紹介まで飛び出した。君主の横暴をそのまま後世に伝える意味でもあるのだろうか。大建さんはロンドンにも七、八年住まわれたはずだから、そんななかでご家族として体験されたことなのかと思うが、世界史の授業の中身よりよほど関心を刺激されて記憶にのこることだった。

以上の話は登場しないものの、『風の回廊』では、大建さんならではの体験や知識、好奇心から引き出されたものもろもろが生き生きと語られていて興味深いものになっている。

日輪に我が影つくる力なく白夜の街の
われはまぼろし

巻頭に近い「ロシア断片」にみえる作品をまず挙げてみたい。モスクワ赴任は就職してすぐ、東京オリンピック開催の年のことだったようだ。国内は格段に豊かになり、働くこと励むことがそのまま実績や成果につながった時代だった。国外に赴任することも実力を見込まれての晴れがましい任務だったはずだが、気候は厳しくビジネスの状況もけっして甘くないモスクワ勤務だったのだろう。一連十四首には、極寒の地に赴いた日本の青年の日々の思いがつぶつぶと語られている。零下二十度。その中に身を置いて気づいてみれば、夜も沈まぬ日輪はあまりに頼りなく、人の影すらつくる力がない。とすれば、薄明りのなかの自分はさながら幻。まるで存在を消されているかのような異国体験だったに違いない。感傷を極力抑えた下の句の展開が大建さんの内面をよく語っている。作品をたどると、懸命にならざるを得ない勤務の合間にトルス

トイの墓前に佇み、ドストエフスキーの書簡集に親しみ、またロシア民謡の哀切を聴きとろうとしている。そんな現実への向かい方がさすがである。

削ぎ落とし筋骨のみなるチェーホフの
散文の簡 短歌にぞ似る
(恋人に返信切手を封ずる人) チェホフ
のメモは短編化されず

随所で語られているチェーホフは、大建さんの生涯のテーマと言ってよいのだろう。この二首は「アントン・パヴロヴィッチ」の中にみえる。察するところ、医師として弱者の立場に立とうとしたチェーホフの人間性が大きな魅力なのだと思うが、もちろん大建さんの理解はそう単純なものではなさそうだ。右の一首目は、その明快で無駄のない文体を賛嘆したものだが、原典を読む立場での発言だから、わたしも黙って従い、イメージをふくらませる。ひと呼吸置いて「短歌にぞ似る」と据える直感にほほえまれもしながら。これは、たえず短歌の表現をつきつめて考える大建さんの率直な共感なのだと思う。

チェーホフは几帳面な人だったのだろうか。二首目によると、創作のための断片をこまめに書きつけて残したらしい。一首のための断片をとっさに書きとめる歌びとの習性を思い合せる読者も多いことだろう。さらに、そのメモに造形された人物像が興味をひくところ。何としても返信がほしいという切羽詰まった心理、あるいは相手への気遣い……。でも必ず返事をよこせ、というちっぽけな脅迫と受けとられかねない危うさも。このメモが生かされなかったことに納得したりして、われわれはチェーホフもこの一首もおもしろいと読む。あげた二首に限らず、大建さんが詠むチェーホフの歌には、大建さんのこまやかな想いの軌跡、思索のなごりが感じられる。

このようにチェーホフを愛しながら、努

力家の大建さんは、ビジネスの世界で「通辞」をこなすという極限の緊張も乗り越えてこられた。むしろ、努力の陰に文学への心寄せがあったというほうが現実であろう。そして、長年の苦勞満載の体験さえ、志を貫いてのちの創作姿勢に生かされている。たとえば、大建さんの人間観察のおもしろさ。どこか社会の通念からはそれてしまう人物の所業に心動かされる、ということが多いらしい。

三重塔普請と言ひて五重塔造りし住職
遠流となりき

この歌を含む「遠流」は、二〇一〇年一月号の「りとむ」誌上で「今月の十首詠」として掲載された作品であった。佐渡旅行に基づいて金山や朱鷺が描かれるなか、ちょっと変わった話題となっているのが、この住職。遠流といったら律令制で最も重い流刑で、送られた先は伊豆や佐渡、土佐などだった。佐渡に流されておそらくその地で果てた住職の伝承であろう。塔の建立に尽力したのだから信心の篤さが徳とされていていいはずなのに、三重塔を勝手に格上げして実際には五重塔を造ってしまったばかりに、私欲が疑われたのか、現実には慾が深かったのか、さまざま思いをめぐらせる御仁である。大建さんの口調にも軽侮よりは、どこか同情といおうか、〈あわれ〉の趣があって軽妙だ。

正義感が強く、社会への関心をおろそかにしない大建さんは、一方、肉親や家族への愛についても心をつくしてうたっている。それは、文学志向とも、企業戦士と自ら任ずる半生とも切り離しようのないものだったことが、『風の回廊』を読むとよくわかる。

抑留者の情報求めて母はゆく幼き弟わ
れの手を引き
抑留に働きし炭鉱のブカチャチャ炭弟
が輸入せるといふ奇跡

一回りも年長の兄上はシベリアに抑留され、たいへんな苦難をかいくぐって生還された。長男として父母に尽くし、弟の学資の援助も惜しまず、弟の大建さんに見れば精神的にも大きな支えであり、敬愛してやまない兄上であった。

長男の消息を尋ねて回る母上に手を引かれて行った記憶はなんともせつない一首となったが、右の二首目には神様の戯れとしか言いようのないめぐり合わせが語られている。

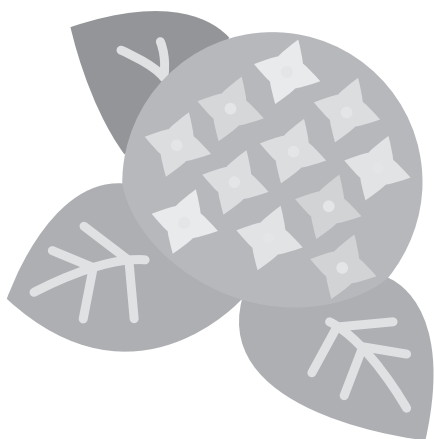
兄上にとっては過酷な上にも悲惨な労働を強いられた炭鉱である。ただただ忌まわしい悪夢だったに違いないが、その炭鉱からの「プカチャチャ炭」を、数十年経て商社マンの弟が尽力し、輸入する運びとなった。しかし、驚きのなりゆきにも兄上は、商談を成立させた弟の功績を静かに喜ばれたのではなかろうか。そう思わせる温厚な紳士の表情こそ、弟が『風の回廊』に描いた兄のものであるから。

紫陽花の蒼なくば梅雨も寂しからむ麦
酒に枝豆われに我が妻
おだまりと老妻叫ぶときありてこの強
さゆえ吾も生き延びき

軽快で楽しい二首を最後に引いておきたい。かなり前に聞いた話だが、モスクワ駐在の大建さんは、シベリア鉄道でひとり大陸を渡ってきた夫人を駅に迎えたのだそう。それはまだ婚約時代のことだったと聞いたように思う。与謝野晶子ばりの再会劇！とわたしは感じ入ったが、その時代もシベリア鉄道の旅はけっしてスムーズでも快適なものでもなかったそうで、晶子に勝るとも劣らない難儀の末、モスクワに到着。お二人は異国での新生活に入られたのだった。

もっとも、外国で日々を暮らすことにおいての苦労は、大建さん以上に奥様の肩にかかっていたことだろう。外国企業と渉り合う企業戦士を家庭内で支えつづけた妻。感謝に満ちた右の一首目、実によくわかるというものだ。加えて二首目のように、いまの大建さんはあっさり兜を脱ぐ。明朗で、さばけていて、どんな事態にも冷静に対処できる女性の強さ。男一生の仕事を見事に成し遂げた夫を前に「おだまり」と叫ぶことができるなんて、私は快哉を叫びたい。下の句の大建さんの素直な得心に、ほのぼの嬉しくなった。

夫人への愛も、大建さんの＜志＞の一環なのだ。わたしはそう確信した。



我が家の一枚のお宝写真

立 古 健 策

齢80も半ば、往時茫々の此の頃ではあるが、先日 必要があって、家のアルバムを捲っていたら、何とも懐かしい父母の写真が出てきた。

我が父母が畏れ多くも三笠宮邸にて殿下とご一緒にお撮りした写真でした。

かつて父から聞いていたことだが、父が市ヶ谷の陸軍士官学校の教官の時に、三笠宮殿下が生徒として入学してきた由。

教官と生徒の関係だが、そのご縁は長く続き、父は毎年、新茶の季節には必ず宮邸に御挨拶に参上していた由。

その際、お撮りいただいた写真が茲に載ったものです。

我が家の貴重な一枚として長く保存されてきたものです。

父は、終戦の年まで、陸軍少将・少年戦車兵学校校長だった。

富士の裾野（現静岡県富士宮市）から戦車を連ねて轟音とともに市街地をパレードした。戦車のあとにはオープンカーにマントを翻した立古少将の姿があった。当時10歳のニチメンOB長谷川洋さんの記憶にもあるそうだ。

時流れて、今や戦後70年、少年兵のその後の運命は知る由も無いが、元気であってくれたらと願わずにはおれない。

なお、父は昭和56年に亡くなりましたが、その際、内田英三様が 遠路遙々、富士宮での葬儀に参列してくださいましたこと茲に改めて感謝申し上げます。



== 三笠宮殿下と我が父母 ==

高 木 亨 一 君 を 偲 ぶ

丸 山 修 作



桜の花がすっかり散って仕舞った今、3月初めに亡くなった亨一君を想い起している。

彼は呆気なく逝って仕舞った。私より10才以上も若く大学は私の後輩ではあったが長いニチメンの勤務生活では同じ機械部門ではあったが一緒に仕事をする事がなく直接部下上司と云う関係ではなかった。親しくなったのはお互い定年退職し年月が過ぎ茲十年前からであった。2006年ニチメン東京社友会が発足したが確か彼は社友会設立以前から世話人としてその準備に参加していた。私が初代会長の河西郁夫氏を継いで2008年会長となってからも目立たず黙々として仕事こなし私をヘルプしてくれた。機械部門の親睦会である機友会でも中心的世話人として縁の下の力持ち的役割を果してくれていた。社友会、機友会共に彼の果した功績は大きい。その上周りからの信望が極めて高く大変な人気者であった。入院してから機友会のことを気にかけて、見舞に

来た豊間根氏に色々話をしていたと豊間根氏から聞いた。彼のおっとりした性格と他人への思いやり配慮の深さが彼の人望を高めたのであろう。

彼は俳人高浜虚子の孫である。彼自身の口からそれを聞いた事はない。昨年発行の社友会会報に「祖父高浜虚子と私」と云う一文を寄せているが彼がこの事を公にしたのはそれが初めてではないだろうか。先に放映されたNHKの「坂の上の雲」に虚子は正岡子規の一番の高弟として子規の最後を看取る場面が出ていた。彼の母上も著名な俳人であった。父上は日銀の局長から日本輸出入銀行の理事を努められていた。彼は斯様な恵まれた環境に育ち慶應高校から慶大に進学した。そして慶應をこよなく愛していた。慶大出身者の親睦会としてニチメン慶應会が牧洋生氏岡島岩男氏らの世話で2008年発足した。亨一君も世話人として協力して毎年八重洲富士屋ホテルで開催された慶應会には必ず出席して会員の面倒を見ていた。見るからにスマートな慶応ボーイであった。

私の現役時代から周りに集う何人かの仲間と年に1／2回都内で夕食会を持ったり時に温泉地迄足を延ばし一泊旅行で更なる親交を強めてきた。後ればせ乍ら当然彼も参加し他のメンバーを喜ばせた。老体の私もそれとなく労す気持が彼の態度から感じられ嬉しかった。彼は口にした事もなく私も聞いた事はないが「俺が丸山の一番の子分だ」と思っていたのではないか。奥様にはそう言っていたらしい。昨年11月の私の米寿を記念し仲間一同伊豆の北川温泉に集まった。既に幾分体調を崩していた彼は仲

故岩田昭二さんとは、ご一緒に何度もお会いして、今だから話そうニチメン秘話などを語りながら、楽しい時を過ごしました。

岩田さんには共に随分御世話になりました。

高木さんの提案で、葉山牛を食べに行ったり、あちこちグルメ三昧を楽しんだ。

高木さんが鎌倉から、桜並木で有名な逗子に瀟洒な家を建てたとき、岩田さん、立古さん共々ご招待を受けて、ご馳走に与ったこと。岩田さん、立古さんが家中のビールのストックを飲みつくしたり、みんな楽しい思い出です。

高木さんは、小生より三つほど若いはずだが、なにかとよく気がつき、むしろ兄貴のようなところもあった。

社友会世話人会のとき、歩行が頼りない小生にご自分の杖を使わせてくれたばかりか、トートバッグの荷物まで持ってくれた。

その親切心は、いまも忘れない。

二人で、東京駅で始発電車を、ホーム最前列で待って、いざ乗車となると後ろから来た他の連中にサーッと座席を取られて仕舞った。積み残された二人は、次を待つしかないが、二度も同じ目にあった。

昔なら他人を押し分けても座席を確保したものなのに、いまや俊敏さを欠くご老体、已む無し。

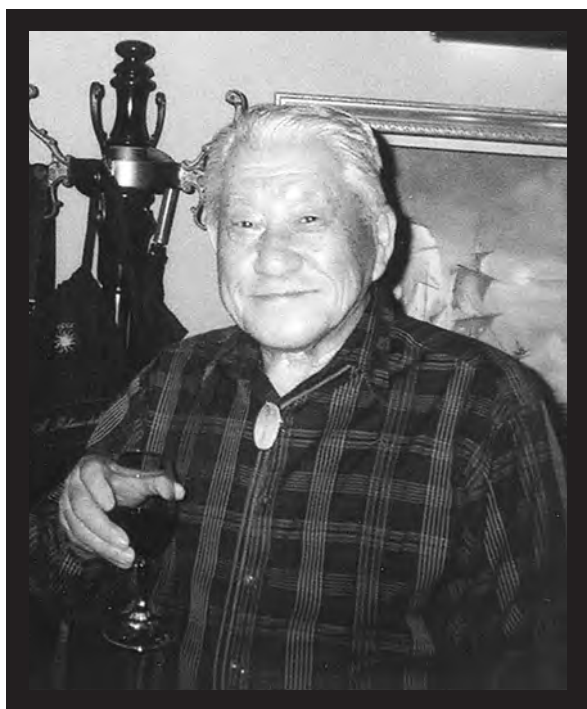
今頃は、あちらで、岩田昭二さんや、田中久彦さんたちと、“やあ、やあ、又お会いしましたね、”と挨拶し、その後の、こちらの話で持ちきりでしょう。“その内に、みんな此方に集まってきますよ”、と言っていることでしょう。そうです。間違いなく、そちらに行きます。

Sooner or later.◦

[illegible]

木村次朗さんを偲んで。

高木恒久



木村次朗先輩が2月26日に亡くなられた。享年81才。鉄鋼原料部長、非鉄金属部門本部長などを歴任、終始活躍された。社内で木村さんを知らない人は1人もいないだろう。「次朗さん」と我々若いものは呼んだが、年上の人達はその時ときで「じろちゃん」とか「おい、次朗」と呼んでいた。明るくて、何時もユーモアが溢れている。仕事に対する情熱とセンスは抜群で、あらたなアイデアでの仕事作りは天才的でした。

鉾石課勤務の頃から、会社が終わるとよく一緒に呑んだ。次郎さんは酒ばかり呑んで食べるのは「モズク」だけだ。熱燗の徳利の首を3本の指で掴んで猪口に注ぐのが習慣。

阪神タイガースの大ファンで、だからタイガースが勝った翌朝は機嫌が良く、負けた翌朝はみじめだった。ある朝次朗さんが出社途上キオスクで売ってるスポーツ紙を全部買い込み脇に抱えて出社、それを見た上司の（故）永井達二さん「おい、ジロー、なんだそんなに新聞抱えて!？」。次朗さんは臆せず「一紙くらいは阪神が勝ったと報じているだろうと思って」。これには皆笑いが止まらない。機関銃のように駄洒落を連発する姿が懐かしい。

前述通り、木村さんは新しい仕事の開拓心が旺盛で、私は多くを学んだ。「宇土丸」という定年を迎えたバラ積み船がスクラップにされる運びだった処を、修繕してリベリア船籍に変えれば税金は安く、海外航路でまだまだ仕事が出来るといふ。それには船名を変えて再登記するのだが、次朗さんは船名を UDOMAR. UDOMARU の最後の U 一文字を消すだけで、ペンキ代も殆ど掛らず、ウドマーという洒落た名の鉄石運搬船が誕生し、結構海外で稼いでくれた。他にも定年を迎えた邦船を何隻もリベリア船籍に変えた。

イガラ号というアキレ・ラウロ（ギリシャ）社の鉄鉱石専用船がフィリピン沖で座礁。ラウロは船を2つに切断、後部のみを生かして船を再生することになった。この話を耳にした次朗さんは船主と交渉、邪魔になる積荷のブラジル鉄鉱石を何処かに処分する約束をして来た。で、私に鉄鉱石を売却せよとの指示があり、結局は川鉄さんにこの積み荷を買って頂いたのだが、話は簡単ではない。真二つに切断された船は海運法では既に船ではなく、危険物なのだ。タグボートで千葉の川鉄の岸壁に接岸させたが、川鉄はバースを壊されては次々に入ってくる船の荷揚げが滞るからと話は暗礁に乗り上げかけたが、川鉄の山崎輝夫さんのお知恵とご尽力のお蔭で兎に角鉄鉱石

を引揚げて貰い、お買い上げ頂いた。実際この作業は大変で、なんでこんな事に時間とエネルギーを費やさねばならないのか、その時の私は不満だったが、この一件を片付けたことで、私はいろいろな知識を実践で身に付けることが出来た。そんなご縁から川鉄OBの山崎さんとは今もお付き合いが続いている。（山崎さんはニチメンの先輩故小田史郎さんと偶々東大の柔道部で同期）

次朗さんはロシア以外にニュージーランドの砂鉄、モーリタニアの鉄鉱石、船舶関連ビジネスなどに力を入れておられた。定年後ニチメンジュエリーの社長になってからは、ダイヤモンドの買い付けでロシアに出張して来られ、当時モスクワ勤務だった私と久々に再会した。我々二人はウオッカのグラスを3本の指で掴みチョウザメの燻製を肴に深夜までチビリチビリ、愉快的「モスクワ郊外の夕べ」を楽しんだ。

退職後の次朗さんは、ネットを駆使して芸術作品を次々に作成、その為に彼方此方から資料を集め、また自分で写真撮影するなどして「花の美」「お江戸の名所探訪」「切手の世界」などなどのストーリーを制作されたが、いずれも玄人はだしの傑作ばかり。人生を楽しむ事でも達人だった。

次朗さん、安らかに休息ください。合掌。



【編集後記】

この『会報』も、2006年創刊以来、今号で第18号となる。
ゴルフ・プレイならば、18ホールを終えて上がりとなるところ。
会報チームも青息吐息ながら まだ頑張っています。

さて毎度のことながら 『物故者リスト』を眺めては、思いに耽る。
“次郎ちゃん”こと木村次郎さん、“亨ちゃん”こと高木亨一さん、ともに斯界において、
ニチメンの名を高からしめた名プレイヤーでした。
会者定離の人生を甘受せざるを得ないものの、われらの心には今も生きている。

2012年、100歳で亡くなった映画監督・新藤兼人は、戦時中に海軍で100人の部隊うち、
最後の生き残りの6人の一人となって生還した。
その戦争体験が遺作『一枚のハガキ』に表れている。
又“老いの本質”については、『午後の遺言状』で描いている。

『一枚のハガキ』を撮り終えたとき、“もう いいやって感じ”と話したそうだ。
日経の“私の履歴書”で、愛妻・乙羽信子の思い出として、『人は死んでしまうが、死な
ない人もいるものだ』と述べている。

まさに至言である。われらの集まりでも、談論風発、懐旧談のなかで、いつも語り継が
れる敬愛する先輩、同輩、朋友がいるものだ。

ニチメン入社以来、はや58年目の筆者は 今を如何に生きるか。
答えは簡単。 まあ、好きなことのみ、大いに楽しみ、ストレスを感じることは一切やら
ない。

今のシニア・ライフのテーマ曲として、THE BEATLES の“LET IT BE”の名曲に
酔いしれるのも良いかも知れません。

(長谷川 洋)

ニチメン東京社友会

〒100-8691 東京都千代田区幸町2-1-1
飯野ビルディング17F

発行人	；倉又 則夫	副会長兼代表世話人
編集責任者	；長谷川 洋	副会長
アドバイザー・スタッフ	；倉持 次雄	世話人
	竹内 可能	世話人
印刷所	；(有) 関 内	印刷